

# 乳幼児期の言語発達に関する一考察

## 3. 姉・弟の場合

### A Study of Infancy Language Development

#### 3. A case of a sister and a brother

(1988年4月7日受理)

平松 芳樹

Yoshiki Hiramatsu

**Key words:** 言語獲得, 縦断的観察, 発声内容分析

## はじめに

自閉的傾向を示す子どもの相談に応じたり、1歳半ないし3歳児の教育相談の場面でしばしば直面することは、言語発達の遅れを主訴とするケースの多いことで、言語獲得あるいは言語発達に関する問題意識の強さをあらためて感じるものである。

言語獲得の理論的研究については、大浜(1984)<sup>1)</sup>によって近年のわが国の研究動向が要約され報告されている。これまでの言語獲得に関する多様な研究を大別すれば、行動分析的立場と生成文法的立場および認知心理学的立場に区分できるとして、それらの研究を紹介し論評している。この分類からは本研究は行動分析的方法に中心があり、他のアプローチの視点もとり入れる必要を感じている。

さらに、1983年から1985年間の言語獲得に関する研究の概説と論評が綿巻(1986)<sup>2)</sup>によってなされているが、とくに初期言語獲得にスポットが当てられ、今後の研究課題が提示されている。そして、発達障害児の言語発達研究の重要性が指摘されている。今回の筆者の研究も、発達障害児の言語発達を促進するための基礎的な資料を提供できるものになりたいと考えている。自閉児の言語発達の特徴については以前に概要を報告した(平松, 1983)<sup>3)</sup>が、続いて自閉児と非自閉児(標準的発達の子ども)との比較研究の試みも報告した(平松, 1984)<sup>4)</sup>のである。今回は標準的発達の子どもの観察記録の分析を新しく加えて、前報の推論を再検討することを目的とした。

## 方 法

### (1) 観察対象と観察期間

ある家族の2人の同胞を、生後間もない頃から縦断的に観察できる機会を得た。家族構成は病院勤務の医師である父親と、主婦として自宅で育児にあたる母親と、次の2人の子どもの4人家族である。

姉：1981年1月29日生。生後4カ月から1歳6カ月までの間、1カ月に2～3回家庭を訪問し観察記録をとった。本来ならもっと長期の記録をとる予定であったが、父親の転勤で中断した。1歳9カ月の時点で1度記録の追加ができた。発達は順調で現在は小学校2年生である。1歳2カ月時の発達指数(DQ)は107で、2歳8カ月時のDQは119であった。検査はいずれも津守ら(1961)<sup>5)</sup>のものによる。

弟：1985年6月14日生。生後4カ月から観察を始め、毎月1回の観察を現在も継続中である。姉の記録中断後、本児誕生の頃父親の勤務地が再び岡山となったのである。2歳8カ月時のDQは116(検査法は

姉のものと同じ) であり、順調に発達している。

(2) 観察記録と分析方法

姉の観察記録をとった当時は、倉敷市内の閑静な住宅地の 1 戸建住宅であった。弟の場合は岡山市内のマンションの 4 階の居室であるが、姉の場合と同様の閑静な住環境は維持されている。観察時間はどちらも 1 回 30 分間で、ごく日常の自然な状態を記録できるようにした。記録は VTR に収録し、分析は後日に行なった。分析に使用したのは、この 30 分間のうち前後 5 分間を除き中間の 20 分間のものである。以下の報告の平均発声数は、したがって 20 分間の平均値である。

発声の内容を次の 3 種に分類する。これは自閉児の言語を分析する時に用いた基準と同一である。

1. 了解不能発声：意志表示とはみなされない発声で、発音遊びなどいわゆる喃語がこれにあたる。
2. 了解可能発声：有意味単語ではないが、要求や拒否などのジェスチャーや表情に対応した発声。
3. 発語：発音に乱れのある幼児音であっても、一応意味の判別できる単語をこれにカウントした。

結 果

(1) 総発声数

まず、姉と弟の総発声数の推移をみるために図表を作成し比較した。観察を開始した生後 4 カ月時から 1 カ月単位で、1 歳 9 カ月までの記録である。発声内容を了解不能発声、了解可能発声および発語に分け積み重ねて図示した。図 1 が姉の方であり、上で述べた理由で 1 : 7 と 1 : 8 のデータが欠けている。図 2 は弟の方であり、期間は同一である。1 : 8 のデータが欠けたのは筆者の都合で記録がとれなかったためである。

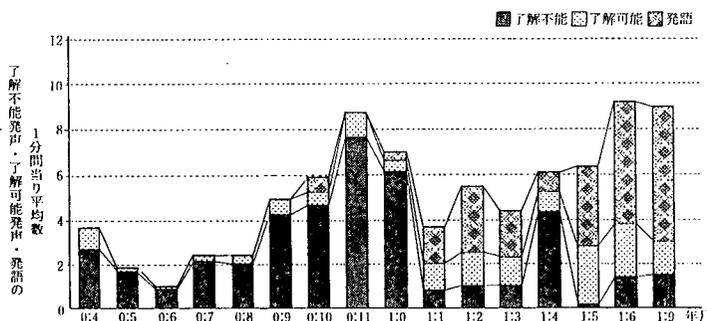


図 1 年(月) 齢別発声数の推移 (姉)

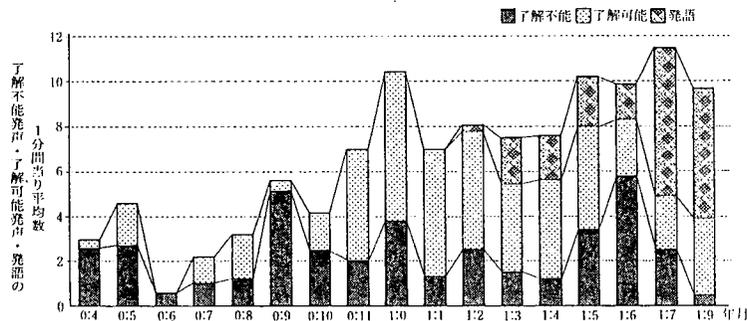


図 2 年(月) 齢別発声数の推移 (弟)

図1および図2を比較すると、総発声数の年(月)齢経過での推移にかなりの相似性を認めることができる。共通してみられる傾向としては、6カ月目の発声数に落ち込みがあり、1歳前後にひとつのピークがある。そして1歳過ぎに少し減少した後、漸増傾向がみられるのである。もちろん、1カ月に1度、しかも1日のうちを30分間だけ切り取って観察した結果を並べたものであって、その日の子どもの体調とか情緒に影響するような環境の諸条件が統制されているとはいえない。したがって、この相似性をあまり強調することはできないであろう。しかし、観察時の状況を勘案したり母親の印象などを補足すれば、ある程度その時期の特徴をつかめていると考えられる。

総発声数の推移をやや長いスパンで分析するために、観察開始から半年間を1期として、その後も半年ずつをひとまとまりとして3期に区切ってみたものが表1と表2である。どちらにも発声数の増大傾向がみられる。表1の姉の場合、1期の1分間当り平均発声数は2.7であったものが、2期には2倍の5.8となり、さらに3期には3倍近い7.6と増加している。表2の弟についても明らかな増大がみられる。

姉と弟の比較では総平均発声数は弟の方が多いことが分る。3期のそれぞれを比較してもいずれも弟の方が発声数が多いのである。

表1 月別および期別総発声数(姉)  
(1分間当り平均数)

年 月	総 発 声 数	
	月 別	期 別
0 : 4	3.6	(1期) 2.7
0 : 5	1.9	
0 : 6	1.1	
0 : 7	2.4	
0 : 8	2.4	
0 : 9	4.9	
0 : 10	5.8	(2期) 5.8
0 : 11	8.7	
1 : 0	6.9	
1 : 1	3.6	
1 : 2	5.4	
1 : 3	4.3	
1 : 4	6.0	(3期) 7.6
1 : 5	6.3	
1 : 6	9.1	
1 : 9	8.9	
総平均発声数		

表2 月別および期別総発声数(弟)  
(1分間当り平均数)

年 月	総 発 声 数	
	月 別	期 別
0 : 4	3.0	(1期) 3.2
0 : 5	4.6	
0 : 6	0.6	
0 : 7	2.2	
0 : 8	3.2	
0 : 9	5.6	
0 : 10	4.2	(2期) 7.3
0 : 11	7.0	
1 : 0	10.4	
1 : 1	7.0	
1 : 2	8.0	
1 : 3	7.5	
1 : 4	7.5	(3期) 9.7
1 : 5	10.1	
1 : 6	9.5	
1 : 7	11.4	
1 : 9	9.7	
総平均発声数		6.6

## (2) 発声内容

次に、発声の内容を質的な側面から検討する。すなわち、発音を楽しむような自己内完結的発声であって、まわりのおとなには意志伝達意図の了解ができない発声と、要求や拒否などの意志伝達意図の了解できる発声、および意味のある単語としての発語とに分類して、発達的变化を分析した。

図3および図4は、了解不能発声、了解可能発声、発語のそれぞれの占める割合の発達的变化をとら

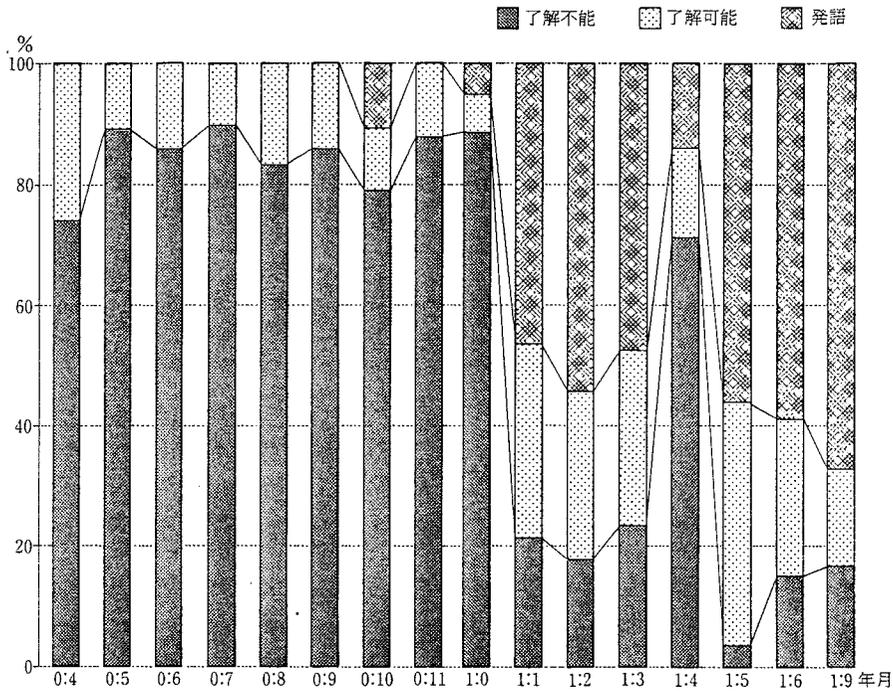


図 3 発声内容の割合の発達的变化 (姉)

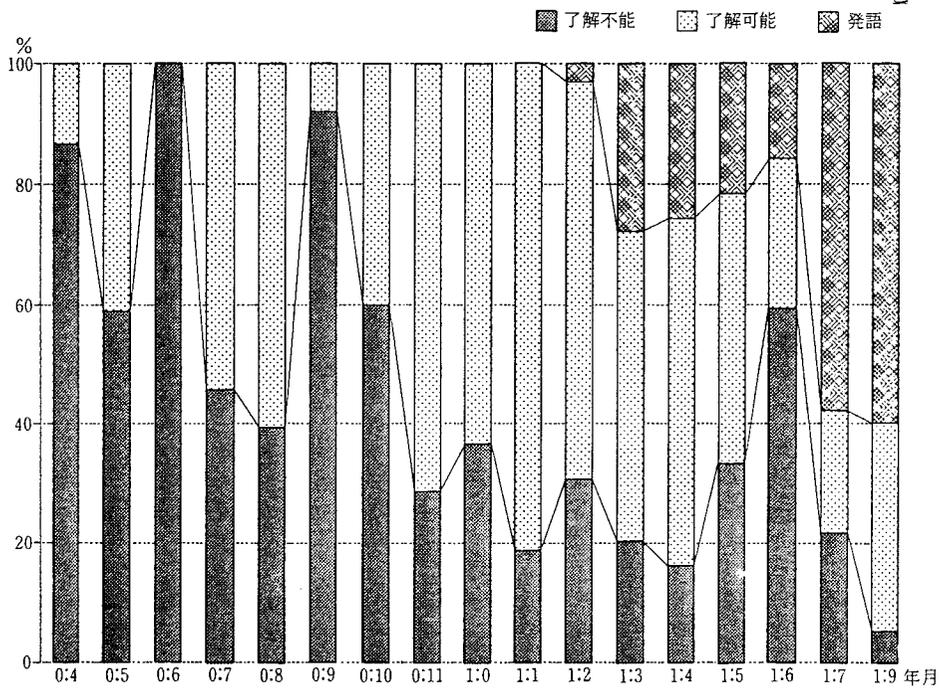


図 4 発声内容の割合の発達的变化 (弟)

えやすくするために作成した。実数は図1と図2に示している。

(a) 姉の場合

図3が姉の方の発声内容の発達であるが、1歳までとそれ以後に顕著な相違がみられる。すなわち、1歳までは喃語のような自分で発声を楽しむようなものがほとんどであったものが、一変して翌月から急減するのである。ただ1歳4カ月時には一時的に増加している。また、発語については10カ月にわずかながら見られ、翌11カ月で消失し、満1歳で再びわずかに見られ、その翌月には過半数に達する増加をみるのである。つまり、この女児の場合は満1歳が言語獲得の重要な転換期であったといえよう。

先に総発声数について試みたと同じように、3期に区分した発声内容の変化を表3に示した。9カ月までの1期では、発語はまだ現われず、了解可能な発声はわずかにあり、ほとんどが了解不能な発声であった。しかもその量は少ない。10カ月から1歳3カ月までの2期で発声数全体量が增大するのであるが、発語が現われてくるのが特徴である。了解不能発声の量も増えるのである。1歳4カ月から1歳9カ月までの3期では、発語量の伸びが著しい。他の発声の2倍以上となるのである。

なお、10カ月時の発語については、その判定がやや甘いきらいがある。具体的には「パパ」という発音を「父親ないし男の人」の意味を表わす語として認めてカウントしたものである。本児にとってどの程度の認知をもって発音されたのか判然としないのである。たしかに筆者に呼びかけているようでもあり、単なる発音遊びであるのかもしれないようなところがあった。実際この日は「パパ」の音は「パ」「パピ」「パプ」を含めると33回カウントできたのであるが、このうち12回を前後の文脈から推測して発語と分類したのである。このようなあいまいさは本研究の全体を通して存在し、前後の関連からようやく判定できるものも多くあったのは事実である。さらにつけ加えるなら、発声数のカウントも微妙なところがあった。

例えば「ア、ア」と切れれば2とカウントし、「ア-ア」つながれば1と数えることを原則としたが、断続の判定に迷うことも多かったのである。

さて、本児の満1歳の発語は「ママ」「パパ」「ワンワン」の3種をカウントしたものである。この他観察時間外にいくつか発語があり、レポートリーが拡大していて、10カ月時のあいまいさからは脱して、物の認知と結びついていることが感じられた。その後さらに飛躍的に発語数と種類が増えて行くのであるが、まだ母親に促された発語模倣ととれるものもあったし、幼児独特の発音の乱れのため、発語とはとれないで了解不能発声に分類したのもあると思われる。

(b) 弟の場合

表3 発声内容の期別変化(姉)  
(1分間当たり平均発声・発語数)

期	年 月	了解不能発声	了解可能発声	発語
1 期	0 : 4	2.2	0.4	0
	0 : 9			
2 期	0 : 10	3.5	1.0	1.3
	1 : 3			
3 期	1 : 4	1.8	1.8	3.9
	1 : 9			
総 平 均		2.6	1.0	1.5

表4 発声内容の期別変化(弟)  
(1分間当たり平均発声・発語数)

期	年 月	了解不能発声	了解可能発声	発語
1 期	0 : 4	2.2	1.0	0
	0 : 9			
2 期	0 : 10	2.3	4.7	0.4
	1 : 3			
3 期	1 : 4	2.6	3.4	3.6
	1 : 9			
総 平 均		2.3	3.0	1.2

図2および図4が弟の場合の発声内容の発達的变化を示すものである。そして表4には3期に大別した場合の変化を示した。

まず、期別変化でみると、1期で発語が現われていないことは姉の場合と同じである。そして、2期はごくわずかで、姉の3分の1にも満たない。しかし3期で著しく増大し、1分間当り3.6となり、姉の3.9と大差なくなっている。

要求や拒否などの態度に結びついた発声(了解可能発声)は、1期では少ないが、2期で4.7倍にも増大する。とりわけ11か月から1歳4か月までは発声全体の7割程度を占めている。全期を通じてこの了解可能発声の多いことが本児の特徴であるといえよう。姉の場合とくらべると、1期で2.5倍、2期は4.7倍、3期1.9倍であり、全期間通しての平均で3倍にもなっている。さらにその内容をみると、1期ではむずかった泣き声やあやしかけへの喜びの発声が多い。2期でも、むずかりや喜びの情緒表出に結びついた発声も多いけれども、自分の要求を伝えようとする意図と結びついた発声が多くなる。とくに1歳前後には、指さしを伴っていて、自分の意図を伝えようとしていることがよく分るのである。3期にもいやがったり歓声を上げるという情緒表出に伴うものや、欲しいものがあるとか抗議の意志を表現する発声が多くみられた。

一方、発声遊びのような了解不能とした発声についても、この観察期間中を通してかなりみられる。発声の割合からみれば1期に多く、2期、3期は少ないといえるが、発声数では全期を通して1分間当り2.3であり、1期 2.2, 2期 2.3, 3期 2.6と変動は少ない。姉の場合には1歳半までが多くその後急減したのとくらべると大きな相違であるといえる。

## 考 察

前報(平松, 1984)<sup>4)</sup>では、自閉児とそうでない標準的発達の子どもと比較して、発声数や発声内容を分析することにより、言語獲得に重要な鍵をさぐろうと試みたのである。この時2人の自閉児のうち総発声数の多かった方が、その後の発語に結びつく割合の高いことが明らかとなった。標準発達児としてデータを比較したのが今回報告の姉のものであった。これをもとにいくつかの推論を試みたのであるが一例だけで推論することには当然危険性が大きい。そこで標準発達児のデータを加えるべく、3児の縦断的観察を開始したのであり、その1人が今回報告の弟である。他の2児の観察は途中で転居したため不完全であったので分析には加えなかった。

さて、前報の推論を今回のデータを加えて考察するならば、以下のようにまとめることができる。

1. 要求、拒否などの表現と認める了解可能発声は、ことばの発達の有意な指標とはならないであろうと推論していたのであるが、これを見直す必要があるというのが第1点である。姉の場合の発達では了解可能発声の数が少なく、観察期間中の総発声数に占める割合も2割弱であったことから、この推論をしたのである。しかし、弟の言語発達の分析からすると、了解可能発声の全体に占める割合は5割近くにのぼり、重視する必要があると考えられる。3期に区分する観点からすると、姉の場合にも漸増傾向がはっきりみられて、発声数全体の漸増傾向と軌を一にしているのである。弟の場合は発声数が姉よりも全体に多いのであるが、3期にわたる総発声数の漸増傾向は同様にみられるのである。了解可能発声だけでは2期が最も多いことから、言語獲得期にことばの代用に使われる頻度の高いことを示していると考えられる。したがって、前報での推論を訂正して、了解可能発声の増大がことばの発達の有意な

指標となるといっておきたい。

2. 了解不能発声（喃語）が多いほど、後の有意味語と結びつくことが多いとしたことはそのまま支持できる。ただし、弟の場合には了解可能発声も加えて考慮する必要がある。

3. 喃語は単純な発声からしだいに複雑な発声を組み合わせるようになるとした点については、弟の場合にもみられることであったので支持できる。ただ、姉の方が発声のレパートリーが広く多彩であり、弟の方がシンプルであった。1期では大差ないが、2期でその傾向が顕著となり、姉の場合には一息でつながった長い複雑な発声が目立ったのであるが、弟の場合は短いものが多かった。

4. 喃語が減少するにつれ発語の割合が増大するという質的転換期があり、それは満1歳の誕生頃であると推論した点については、少し修正する必要がある。弟の場合、3期に区分した変化をみても量的にはほとんど増減がないのである。むしろ了解可能発声の減少と発語の増大といい換えた方が適切である。しかも弟の場合、発語の増加は姉よりも数カ月遅れて現われるので、質的転換期をもう少し幅を持った表現にしておく方が適切である。これは個人差の問題であり、データ数が多くなればなるほど範囲は広がる性質のものである。ちなみに、この姉弟の全身運動（移動運動）の発達をみるとほとんど差はない。ねがえりが5カ月、ひとり座り7カ月でははいはいを始めたのが姉は7カ月で弟は8カ月と少し違った他は、つかまり立ち9カ月、歩き初め11カ月と全く同じであった。運動機能の発達とく比べると言語発達はとくに個人差が大であることはよく知られている。この姉弟の場合、言語理解の面ではほぼ同じペースで進んでいる。1歳頃からおとなの指示が理解できるようになり、その後数カ月でかなり意志が通じるようになっていく。しかし、発語のはじまりの時期と増加のペースにはかなりの差が出ているのである。その割には1歳9カ月の時にはほぼ同じレベルになっているのである。したがって、前報の表現は次のように改めたい。ことばの獲得と発声数の増大とは深い関連があり、発音遊びのレパートリーが拡大するとともに、自分の意志表示の発声が増加する中から有意味な語が生まれ、子どもが特定のものと結びつきを認識したところからその使用頻度が増大する。この質的变化の時期は1歳から2歳の間にありと考えられる。なお、言語発達には個人差の要因が強く働くので獲得時期や速度に差があることは考慮される必要がある。

ところで、今回とくにはとりあげなかった要因として、子どもの性格のちがいや環境のちがいないなどの問題がある。環境面では親の養育態度は比較的一貫していたと思われるが、姉の場合は同胞がいないのでひとりっ子の扱いになったであろうし、弟は末っ子で甘やかしやすくなると思われる。また弟の方は姉があやすことも多いし、姉の友だちの訪問もあって子ども同志のふれ合いの機会が多く、いきおい社会性が助長されるであろう。なお、母親の子どもたちへの言語発達に対する働きかけが積極的であったと感じられたので言及しておきたい。発声を発語に結びつけようと促進する態度がうかがえ、ことばのよき教師の役割を果たしていたと評価できる。たとえば、「パ」の音が出はじめた時、「パパ」と発音するようにモデルを示しながら根気よくくりかえしていた。本児も発音遊びの中で「パ」音をくりかえしているうち、1～2カ月の間に「パパ」が父親または男の人の意味と結びついたり、名前を呼んで「ハイ」と返事を催促することをくりかえすうち、最初は無視的であった子どもが「ハイ」と返事をするようになるのである。一方、性格面では、2人とも手厚く養育されていて、母親とのアタッチメントも充分につき、安定した性格であることは共通しているが、気質面には相違がみられた。姉の方が情動変化もおだやかで、いわゆるおっとりしておとなしいという印象で、弟の方は情動のゆれが大きく、甘えの表現も大胆であるように感じられた。

## 要 約

発声数と発声内容を分析することから、初期の言語獲得について検討している。いわゆる標準的な発達を示しているとみなされる2人の子ども(同胞)の観察データを比較検討して、前報(平松, 1984)<sup>4)</sup>の推論を修正した。

まず、乳児期に発声数の多いことが後の有意味語に結びつきやすいといえる。この時の発声内容は、発音遊びのような伝達の意図をもたないものでもよいし、要求や拒否に結びついた情動や意志に結びついたものでもよい。この時期に養育者のタイミングのよい積極的な働きかけが発語を促すと考えられる。

次に言語獲得の指標としての発語の現われとその後の増加には個人差が大きく、言語理解の発達とは必ずしも結びつかない。しかし、おおむね1歳から2歳の間に、発声から発語への質的転換の時期があると考えられる。

## 文 献

- 1) 大浜幾久子 1984 言語獲得 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩XXIII 金子書店 51-72.
- 2) 綿巻 徹 1986 初期言語獲得 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩XXV 金子書店 79-109.
- 3) 平松 芳樹 1983 乳幼児期の言語発達に関する一考察 1. 自閉児の言語について 中国短期大学紀要 14 61-68.
- 4) 平松 芳樹 1984 乳幼児期の言語発達に関する一考察 2. 自閉児と非自閉児 中国短期大学紀要15 43-50.
- 5) 津守真・稲毛教子 1961 乳幼児発達診断法 0歳~3歳まで 大日本印刷.